

地域・海外リサーチセンター：ふくしま広野未来創造リサーチセンター	
題目	第1回ふくしま学（楽）会（ふくしまから伝えたいこと、知らなければいけないこと。）
著者	永井祐二、李洸昊、松岡俊二

概要

福島県浜通り地域の復興のための従来の多くの交流の「場」は、地域住民の参加が少なく、必ずしも本来の地域課題に関する交流の「場」として機能していないという限界があった。このような観点から、既存の「場」とは異なる地域の多世代交流の「場」として、ふたば未来学園高校生も含めた「第1回ふくしま学（楽）会」を開催した。ふくしま学（楽）会の成果と課題を踏まえ、今後の福島再生をどのようにすればよいのかを研究する。

本年度の研究開発と成果

福島県浜通り地域では、広野町などによる国際フォーラムなどの交流の場が設定されてきたが、放射線リスクや廃炉などの専門的議論が中心のため、地域住民の理解促進にはつながりにくく、本来の地域課題に関する交流の場としては機能してこなかった。このような観点から、既存の場とは異なる地域の多世代交流の「場」として、ふたば未来学園の高校生も含めた「第1回ふくしま学（楽）会」を2018年1月28日に広野町で開催した。

福島県浜通り地域は原子力災害による県内外への避難者が多く、一方でこの地域を中心に国や県が進める福島イノベーション・コースト構想により、外部からの作業員などの転入者が多い。このような特殊な状況において、国や県は復興促進のために地方自治体に対する補助金などによる支援を展開しているが、地域再生にとって最も重要である住民参加型まちづくりが弱い。また、地域団体や行政がまちづくり事業を推進しようとしても、若い世代の参加が少ない。このような状況を改善するために、今回はふたば未来学園の高校生、NPO関係者、地域住民、行政、大学の研究者が参加し、世代や立場による「しがらみ」を越えた対話の中で、福島未来を考える「場」を設定した。地域の様々な関係者が参加し、普段は交流のない世代（複数の世代や立場を越えた発表者）の意見を直接聞くことができた。また、従来の協議会などとは異なり、住民の思い、役場の本音、学者の言い分を生々の声で聴くことができ、お互いの考え方の違いや共通点などの確認ができた。このことより、参加者の絆も深まった。議論だけで終わるのではなく、新たな発想や協力関係の創出から地域再生のための次の具体的なアクションが明確になった。

次年度の研究計画

今回の試行による「場」づくりは、第1段階のため、それぞれの立場の意見表明を行うという側面が強くなった。そのため、それぞれの立場で意見が異なることは認識できたが、問題を誰がどのように解決するのかのような具体的な提案までには至らなかった。また、参加者数が75人であり、時間制約のため、各人の意見を全て聴くことができなかった。この点を踏まえ、次年度の第2回では、第1回で提示された課題を、5W1Hの視点から討論し、参加者一人一人の意見全てが吸収できるように進めたい。今回築いた「世代間の交流・様々な立場の人との交流」を、日常的な活動等での交流でも活かし、より強固なものにしていきたい。

「第1回ふくしま学（楽）会」の様子

